



春闘とは？ 基本にかえって考えよう



ついに「官製春闘」という珍語が、新聞紙上に登場しました。安倍首相が、春闘の主役になりかねない風向きです。また経産省が、賃上げした企業を公表し、減税を実施するといっています。賃上げ問題は、所管は厚労省ではなかったでしょうか。どうして経産省？ 安倍政権の目線では、賃金は労働者の生活や権利の問題ではなく、景気や成長軌道の道具なのです。

今から40〜50年前「春闘」という言葉が国際的にも定着した時期には、春闘で連想されるものは、貼りめぐらされた怒りのステッカーであり、工場に林立する赤旗であり、掛け声も勇ましいデモでした。春闘になると労働者意識を覚醒させる「春闘左派」も大勢いました。まさに隔世の感です。職場討議の中では、よい搾取がない

のと同じように理想的な賃金というものもない、資本家が賃金マンジュウに盛り込もうとする毒、つまり労働者を分断・萎縮させようとする要素が少ないのがマシな賃金なのだ、等々の意見がたたかわされました。労働者は「団結強化」と「職場討議」という解毒剤をもたねばならないということが強調されました。

「官製春闘」には、左手で与えたもの以上を右手で取り上げる、競争・分断で労働者の団結を壊滅させようとする猛毒がふんだんに盛り込まれるでしょう。労働者という基本にたった学習、細い糸であろうと縦横に団結を紡ぎ上げる仲間の討議という解毒剤をもつことが、あらためて必要だと思われまます。

労働大学副学長 今村 稔